
君はまだあの月に手を伸ばしているか

カラクリカラクリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はまだあの月に手を伸ばしているか

【Nコード】

N3858V

【作者名】

カラクリカラクリ

【あらすじ】

月に焦がれていた。あの、冷たさにも似た鋭さを纏う優しい月に。

猪村と秋月（前書き）

イムラケント
猪村頭人

ただまっすぐに、いつだって全力で

猪村と秋月

クラスメイトと話していた猪村は、長い黒髪の後姿を見つけて窓から身を乗り出す。

「秋月ッおはよー」

うろんげに振り向いた少女にぶんぶんと手を振れば、彼女は気づいて肩を竦めた。

「え。猪村って、あいつと仲いいの？」

特に手を振り返す事もなく去っていく少女を見送りながら、驚いたようなクラスメイトの声に振り向く。

「秋月のこと？」

「なんか近寄りがたいし、怖くね？」

笑わないし、云うことひでえって聞くし、まだ何か云いかけるクラスメイトの口に思い切りロリポップを突っ込んで、猪村はにこりと笑った。

「それ以上云うなら、手を出す」

以前の猪村なら、多分宣言する前に切れていただろう。でも今は、言葉にすることを知っている。秋月に出会って、言葉にしたいことも知った。

「な、なんだよ。猪村あ」

情けない声で抗議するクラスメイトに肩を竦めて、猪村は自分の口リポップを口にしたまま立ち上がる。

「別にお前が秋月と仲良くしようが、しまいがどうでもいいけどな。聞いただけの言葉で、秋月を否定すんな」

「わ、悪かったよ」

しゅんとしたクラスメイトの肩を叩いて、猪村は教室を出た。

「秋月ッ」

「何か用か」

屋上とは別の、時計台にだけ繋がる階段にいつものように腰かけていた秋月が広げた本から顔を上げた。

「サボりすぎ」

「お前に迷惑を掛けた覚えはない」

しらつと云つてのけて、秋月はまた本に視線を落とす。

それに小さく笑って、猪村は同じ段まで上がると、壁に背中を預けて座り込んだ。

「俺もサボりたくなるじゃん」

「私の知ったことか」

そっけない言葉に、初めて言葉を交わした日を思い出して、猪村は

また小さく笑った。

階段につきそつな長い髪を掬い上げると、秋月はうつとつしそつに視線を上げる。

「触るな」

「ごめん、ごめん」

何事もなかったかのように本に視線を落とした秋月の横顔を眺めながら、猪村はあの日を思い出す。

「ね。猪村、転校生が来るんだって」

「転校生？」

「そう。女の子」

くるくると表情が良く変わる岡野の言葉に、猪村は大げさに眉を顰めた。

「何で、この時期？」

季節は6月。

梅雨に掛かりそつな低く重い空模様。

「知らないよ。岡野は聞いたただけだもん」

どんな子かな トレードマークのツインテールをぴよぴよこと動かして、岡野は窓から身を乗り出す。

「落ちるなよ」

「落ちない落ちない。あ、あの子かな」

そう云った岡野の指先を追って、猪村は彼女と目が合った。吸い込まれそうなほど深く、目が離せなくなるほど強い色。

「こんにちは。秋月さん？岡野だよ。こっちは猪村」

「あ、よろしく」

反射的に差し出した手に一瞥をくれて、彼女 秋月はふんと鼻を鳴らした。

「よろしくなくていい」

「え？あれ？」

「生憎、人間的興味を覚えるかは未定だ」

初対面でしらっと云つてのけて、秋月は猪村の所謂”人間的興味”を一瞬で搔っ攫ったのだ。

「秋月」

「用がないなら呼ぶな」

「好きだよ」

「知ってる。人としてな」

時折、どうしようもなく言葉にしたい瞬間があつて、けれど本から顔を上げない秋月にだから告げられる言葉なのだと、猪村自身良く解っている。

「猪村」

「あ、え、何？」

唐突に名前を呼ばれたことにつろたえると、顔を上げた秋月と目が合った。

「今度は何だ」

「え？」

「自覚しろ。意味もなく纏わりついてくる理由をな」

うざったくて敵わん ふんと鼻を鳴らした秋月に、猪村は驚いて、それから肩を竦めて苦笑する。

「すごいね、秋月」

本当に惚れちゃいそうだ 聞こえないように呟いて、猪村はポケットの中のロリポップの包み紙を握りつぶした。

【猪村と秋月】

名倉と秋月（前書き）

名倉 ナクラ 宗 シユウ

此処にいるのに、何処かにいる

名倉と秋月

「名倉君って何考えてるのかわかんない」

「名倉、何処見てるの？」

勝手に近づいてきて、勝手に離れていく存在は、心には何も残さないで、表面を風が撫ぜるように通り過ぎていった。けれど

「そうか。見てみたいな」

あの時、秋月が呟いた言葉が、今も名倉を捉えて離さない。

夕闇がそろりと触手を伸ばして、世界から音を全て飲み込んでいくようだった。

人工的な灯りのない教室には、窓からの茜色に染まった机にうつ伏せる秋月だけ。

零れる穏やかな寝息に、名倉は僅かに目を細めた。

癖のない長い黒髪が、風に流れて床に細い影を落とす。

どうして、人は「綺麗」だと思うのだろう。

どうして、人は繋ぎとめておけないものほど「愛しい」と思うのだろうか。

名倉にはずっと解らないことがあった。

言葉よりも雄弁に、物語る瞳が、感覚があるのに、どうして人は言葉を多用するのだろうか、と。

何も入っていない、空っぽの言葉の群れ。

入れ物であるからこそ、中身のない言葉は驚くほど滑稽で。名倉から、言葉や想いを取り除くには十分だった。

けれど。

あの時唐突に、あふれた言葉の渦に、名倉自身驚いた。

入れ物に入りきらないほどの何かがあることを、初めて知った。

繋ぎとめておけない一瞬を、必死に絡め取るうとすること。

それが想いなのだ、そう気づいた。

「……名倉」

どうしている 消えかけた茜を目で追っていた名倉の耳に、唐突に声が届いた。

「よ、秋月」

「何か用か」

「もう済んだ」

「そうか」

興味もなさそうに紡がれて、名倉は小さく苦笑する。

「秋月」

「なんだ」

「秋月」

「用がないなら呼ぶな」

うんざりしたように首を振って、椅子から立ち上がった秋月の腕を掴むと、揺らがない強い瞳が名倉を捕らえた。

「離せ」

「嫌だつて云つたら」

紡いでからはつとする。

「なんだ？」

「らしくない、な」

ぱつと手を離して、名倉は肩を竦めて小さく笑った。

「秋月といると、どんどん」

「人のせいにするな」

元々そんななんたる 腕組みをして、きっぱりと云つてのける秋月はブレもなく、名倉は目を細める。

「猫が暖かすぎたんじゃないのか」

「そうかもな」

猫を被っているつもりはなかった。

けれども、確かに一線を引いていたんだと思う。

誰かが見るものを、見てみたいと思ったこともなかった。

「秋月の見てるものが、見たい」

「なんだそれは。鏡でもみればいいだろ」

馬鹿馬鹿しいというように紡がれた捨て台詞に、不覚にも名倉は立ち尽くす。

さっさと教室を出て行く秋月を見送るともなく見送って、名倉は手で視界を覆つとどさりと机に寄りかかった。

「ふふ。はは」

零れ落ちる笑いは、自分でも止められない。

「もう駄目だな」

逃げられない。

一度魅了されてしまったら、目を逸らすのは無理だ。

目が潰れると知っても、太陽に焦がれる土竜のように。

誰もいない教室で、名倉は一人その目を細めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3858v/>

君はまだあの月に手を伸ばしているか

2011年9月30日19時09分発行